

第26回シンポジウム「高齢社会を共に生きる」の 実践報告要旨

「ハイブリット・ケア(地域分散型サテライトケア)の展開と新たな地域づくり」 宮島 渡 (社会福祉法人恵仁福祉協会常務理事・総合施設長)

長野県上田市真田町を中心に1993年開設当初の「施設ケア」から次第に住み慣れた地域社会でそれまでの生活を継続するために施設の持つ機能の地域への分散化を展開。2008年の4つの小学校区への拠点(グループホーム・宅幼老所)整備後、中山間地域の人口減少や高齢化、村落機能の崩壊(限界集落)などの大きな社会問題に対して、施設が中心となった新たな地域づくりを目指す事業を展開した。具体的には、特別養護老人ホームへの入居待機者の実態調査、地域住民の情報発信かわら版の発行、点在する小規模事業所での運営推進会議立ち上げによる事業所の住民参画運営や各種イベントの開催を実施した。

「認知症の人、家族、介護者が安心して暮らせる町づくりを目指す『認知症フレンドシップクラブ』活動」

井出訓 (特定非営利活動法人認知症フレンドシップクラブ理事長)

札幌市と近隣市町村において、地域に暮らす方々や地域で支援を行っている団体・施設などとも連携を図りながら認知症になっても安心して暮らせる町づくり活動を独自の運営システムにより展開した。具体的には認知症の人がやりたいことを友人として支援するサポート活動、認知症の人や家族が安心して立ち寄れる店舗や場所を地域に増やすスポット活動、更には認知症の人の就労支援の企画や講演会、伴に歩む思いを繋げるマラソンイベントなどを行った。

「いつまでも住めるまちづくり～一人も見捨てない認知症応援事業～」

下菌 誠 (社会福祉法人朋和会所長)

堺市の泉北ニュータウンが誕生して47年を経過した。その経過とともに、高齢者世帯や一人暮らし高齢者、そして認知症高齢者も増加してきた。この状況の中、認知症高齢者の方々に対して、地域の運営委員の方々とともに、マグネット型、カード型の相談・連絡カードの全戸配布、住民への意識調査、小学校への認知症教室実施、認知症理解の講演会など、地域ごとに高齢者・一般・小学生へ調査、啓発活動を行なった。その結果各地域特有の認知症支援活動グループが誕生し、二つの活動グループは、地域に活動拠点を設け、地域の認知症サポーターの養成、相談日の設置、見守り活動、声かけボランティアなどの実践を積み重ねている。